

「私は、鬼ヶ久保の下り松の狐だが、あんたは、まだ化け方が下手だよ、おしりのあたりから、しっぽが出てゐる。私などは、そんな下手な化け方せん」と、冷やかしたところ、娘は大変驚いていました。

「あなた様は、どうしてそんなに立派に、化けられるのですか」

助さんはすかさず、得意になっていました。

「私の化け道具は、ただこれだけなんだよ」

と、いいながら、ふところから、小さい飯杓子を出して、娘に見せながら聞きました。

「お前さんは、どうやって化けるんじゃね」

娘も、すぐに答えました。



「私は、家に代々伝わる、親ゆずりの、この玉で化けるんですよ」

といって、帯の間から、宝として秘蔵しているらしい、それは美しい、梅干の大きさ程の、金の玉を出して、助さんに見せました。

黄金の玉は、キラキラと光りながら、娘の手の平の上で、輝いているのです。それをみた助さんは「しめた」と思い、いきなり大声を出して、カラカラと笑いながらいました。

「その玉は、ずっと昔の流行品で、私も沢山もっているが、今では全く古く、時代おくれで役にたたん」

娘に化けて、しっぽが出るのは、当然だ」

と、冷やかしながら、尚も続けていいました。

「立派に化けるには、やっぱりこの飯杓子にかぎるよ」といって、自分が手にしている飯杓子を、振りかざして自慢しました。

娘は、さも恥しそうに、目には涙さえ、浮かべながら首をうなだれて、しまいました。助さんはそんな娘の様子をみていいました。

「何もがっかりすることはない。私は、こんな飯杓子は、外にもいくつか、持っているから、あなたの玉と、取り替えてやっ

ていいぞ」

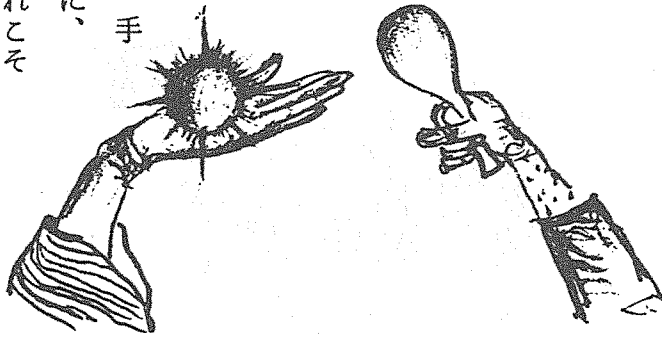
と、いって 娘が手にしていた、光り輝く黄金の玉と、交かんしてやりました。

娘は大変よろこんで、何べんも、何べんも、助さんにお礼を云って、胡麻山の方へ去っていきました。

助太郎さんは、黄金の玉を、手に入れた上に、狐と同じように、何にでも化けられるので、それこそ

有頂天になり、自分で自分の、鋭い知恵に、感心してしまい、大得意になって、だまし取った宝の玉を、ふところにしまうと、意気揚々と、わが家に帰ってきました。

家に帰ったその晩は、親せきや友達など、大勢の人を呼んで、宝の玉を手に入れた、お祝いの酒盛を、開らき



ました。

みんなが集ると、今日の出来ごとを、得意になって話しました。助さんは話し終わると、いよいよ、黄金の玉を、見せることにしました。

そして、うばい取った玉を、大事そうに、ふところから取り出しました。ところが、さあ大変、今まで光り輝いていた 黄金の玉は、みるみるうちに、光が消えてしまい、ただの石ころに、変ってしまいました。

これに驚いた助さんは、もしやと思いつゝ、日置で仕入れて来た、魚かごを調べてみました。魚かごのふたをとってみると、たくさんあった魚は、後かたもなく、一匹残らず、消えてなくなっていました。

助太郎さんは、ただ、ばかーんとして、開いた口がふさがらなかった、ということでした。

コーン。コーン。

石の経文

高鍋史友会報より

昔々、水谷の円福寺に、大層偉いお坊さんがおられました。

ある年の夏の日のことです。お寺の小僧さんが、寺の下を流れる水谷川で、水泳ぎをしていますと、川の中からカッパが出てきて、水泳ぎをしていた、小僧さんをアツという間に、川の中に引っぱり込んで、しまいました。それを聞かれた、和尚さんは、

「よし、いたずらカッパどもを、こらしめてやろう」と、いって、川原にいき、手頃の石をひろって来ました。お坊さんはその石に、有難い経文を書き、石屋にたのんで、ほってもらいました。

それが出来上がると和尚さんは、小僧さんがとられた川の岸にいて、お経を唱えながら、その石を川の中に沈めました。

ところが、その日の真夜中頃のことです。カッパの大将が、和尚さんの枕もとに現われて、頼みました。

「小僧さんを取ったのは、私共が、悪うございました。どうぞおゆるしてください。そして、きょうお沈めになった、石の経文は、取りのけてくださいませんか？」
それでないと、私どもは、水谷川に住むことができません」

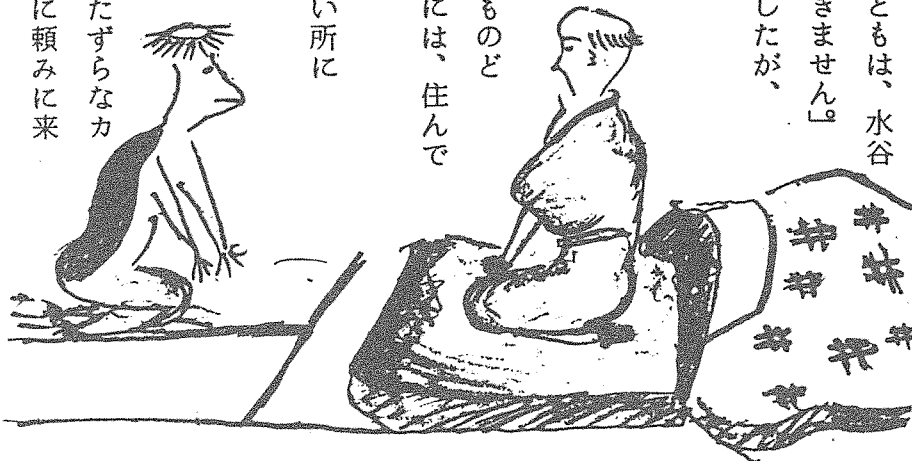
と、悲しそうに頼みましたが、和尚さんは、

「いや、いや、それは決してならんぞ、お前達のようないたずらなものどもは、この水谷川には、住んでもらいたくない、どこにでも住みよい所にいきなさい」

と叱りました。すると

カッパの大将は、

「実は、和尚様、いたずらなカッパどもが私の所に頼みに来



まして、これからは、人様を絶対に取るようなことはし
しません。どうぞ、あの石の経文を取りのぞいてもら
うように、頼んでください。と申しますので参りまし
た。お願いでございます。どうぞ取りのけてください』
と、両手を合わせ、涙を流しながら頼みました。和尚さ
んは、しばらく目を閉じて、何かじっと考えていました
が、可哀そうにも思われて、

「よし、よし、それならお前達の、子や孫など代々の
者が、人にいたずらしたり、川に引き込むようなこ
とをしない、という約束が出来れば、川に沈めた石
の経文は、取りのけることにしよう』

と、いいました。カッパの大将は大変よろこんで、

「早速願いを聞き入れていただいて、有難うございま
す。おおせの通り、きつとみんなに、守らせること
にいたします。ただし、お寺にお客さんのある日は、
前もってお知らせ下さいますと、その日は、決して
川に出ないようにします』

といいました。和尚さんは

「では、どんなにして知らせるのか』

と、たずねますと、

「毎朝、お寺の前を、ヒョウヒョウと、叫んで通りま
すから、その時お知らせ下さい』

と答えました。和尚さんは

「うん、わかった、きつとだな、うそについてはなら
んぞ』

と重ねていうと、

「何でうそなど申しましょう。これからは、きつとよ
いカッパになります』

といいました。和尚さんは、カッパの大将の気持がわか
りましたので、

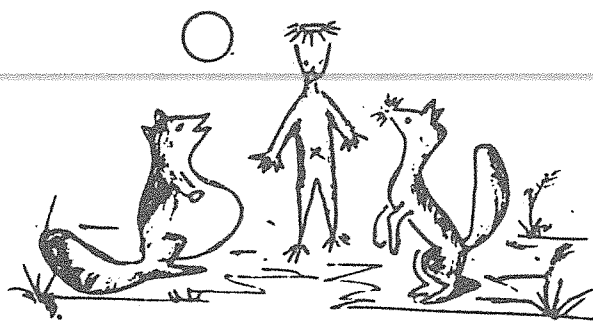
「よし、わかった。それでは明日の朝四ツ時までには
取りのけておこう』

と約束しました。カッパの大将は、大変よろこんで、何
べんも、何べんも、おじぎをしながら、帰っていきまし
た。それから後というものは、カッパが人を取ったり、
いたずらしたりすることは、一度もありませんでした。
水谷川は今も美しく、タンタンと音をたてながら流れて
います。

ひょうすんぼの謀りごと

平原 本田 親 徳

昔々、毛作りの山の中に、仲々知恵のある狐と、三ッ橋（畑田のガソリンスタンド付近）の竹やぶに、大そう偉い狸が、住んでいました。二匹とも大変な自慢屋で、化け方では、お互いにゆずらず、よくけんかしましたがなかなか勝負がつきませんでした。



ところが、小薄（オンズキ）平原の大きな池で、あしが茂り、ワクドや大蛇が出て、人があまり寄りつかなかった。のひょうすんぼが出てきて、まあ、まあということになりました。

そして、ある秋の満月の晩のことでした。ひょうすんぼがやってきて、狐

と狸を呼びだしていました。

「向こうの方から、神祭り帰りの爺さんが、重箱づつみをぶらさげて、ふらり、ふらりとやってくるが、

どちらが気付かれずに、あの重箱のご馳走を、取り上げられるか、やってみよ。」

とけしかけました。

毛作の狐は、す早いことで有名でした。早速きれいな娘さんに化けて、

「アイタタ、アイタタ……」

と苦しそうに、お腹をおさえて、しゃがみこみました。

ふらふらと、近づいてきた爺さんは

「娘さん、娘さんどうしたのか、お腹でも痛むのか。」

とかがみ込んで、尋ねました。狐はそのすきに、サッと重箱を取って、逃げようとしたが、あいにく重箱は手ぬぐいで、腰にしっかり、ゆわえつけてあったので、失敗してしまい、ほうほうのていで、帰ってきました。

今度は狸の番になりました。狸は大きなお腹を、精一杯つき出しながら、道一杯に広がるような、大きい石に化けて、橋の上に、ゴロリと横になり、タヌキ寝入りを

はじめました。
 そんなことは、
 つゆ知らず近づい
 て来た爺さんは、こ
 の大きな石を見て、の
 けようとしたが、
 大きな石はびくともしま
 せん。なかなか動きませ
 ん。何度もやったあげく、つか
 れた爺さんは、やれ、やれとい
 いながら、とうとう石の上に
 腰をおろしました。おまけに
 ウト、ウトと居ねむりまで、
 はじめてしまったのです。狸
 はこれ幸いと、腰に結んだ
 重箱を、取りにかかりま
 したが、いくら手をのば
 してもないのです。爺さ
 んは先程、狐にとられそ



うになったので、どうやら、ふところに入れたらしいの
 です。よし、それなら、ニエーッと長い手をさしのべ、
 ソーッと爺さんのふところに入れました。そのとたん、
 爺さんは、大きな口を一ぱいに開けて、タヌキの手に、
 ガブリと噛みついたのです。多分夢でも見ていて、ご馳
 走が出たと、間違えて食べようとしたのでしょう。

タヌキは、いきなりかみつかれたので、びっくりして
 「アイタタタ……」

と、悲鳴をあげたとたんに、正体がばれて、失敗に終っ
 てしまいました。

それを見ていたひょうすんぼは、笑いながらいまし
 た。

「お前達は、あんまり欲が深いから、失敗したんじゃあ
 自分の知恵におぼれるから駄目なんだよ。人間をだま
 す方法なんか、簡単じゃよ。」

と、尚も笑いました。

狐と狸は、ひょうすんぼの話を聞くとすぐに、

「それはどんな方法じゃあ、教えてくれ」

と聞くと、ひょうすんぼが、笑いながら答えました。

「雨のしょぼ、しょぼ降る晩に、ご馳走をもってきたら教えてやる」といいました。

狐と狸は、それを聞くと本気にして、ある雨のしょぼしょぼと降る晩に、ご馳走を沢山かゝえて、ひょうすんぼが現われるのを、いまかいまかと待っていました。

やがて、「ヒール、ヒール……」と近くで、又遠くの方で、ひょうすんぼの鳴き声が、聞こえてきます。しかし、ひょうすんぼの姿は、一向に見かけることができません。あつちでウロウロ、こつちでウロウロとしているうちに、とうとう夜が明けてしまいました。

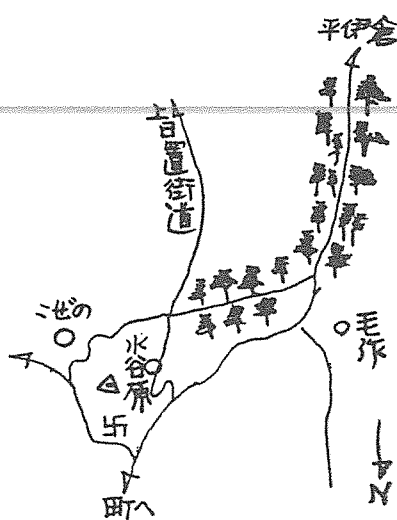
狐も狸も夜が明けると、人間につかまってしまいますので、スタコラサッサと、自分のねぐらに、逃げて帰りました。そして二匹が持っていたご馳走は、そっくりそのまま、ひょうすんぼが、いただいてしまいました。

次の日も、又その次の日も、声だけは「ヒール、ヒール……」としますが、姿は一度も、見せなかったということです。

※このお話は、本田さん（七〇才）が、幼い頃おじいさんから、よく聞かされたそうです。

天狗の騒音

高鍋史友会報より



昔の国道と

もいわれていた、佐土原街道がありました。古い水谷坂を登り、神祭野に出て西の方にもわり、

上日置街道を横切り、追分から平伊倉までの間は、江戸時代の頃まで、数百年もたった松の大き木が、両側に立ち並ぶ道でした。その上この付近は、松や雑木が一面に生えており、人の家も少なく、昼でも暗いような、とてもさみしい道でした。夜ともなると、一層さみしい街道でしたので、この道を通る人は、ほとんどありませんでした。

ところが、この松並木のなかに、三か所ほど天狗松

(松の木、枝の何か所かが、大変繁っているもので病氣と思われる)と呼ばれる所がありました。

そして毎晩、夜が更けてくると、その天狗松の付近は



天狗が出て、松から松へと飛びまわり、げっ剣(剣道)の竹刀の音、烈しい気合の声「エイ エイジュウ エイエイジュウ」と繰り返し呼ぶ声が、四方に響きわたります。

した。それでそのすさまじい様子は、たちまち、世間の
大評判になってしまいました。

明治十三、四年の頃のことです。下養江の斉藤捨五郎
さんが、上日置街道と、佐土原街道の十字路脇に、一軒
の家をたて、お茶屋をはじめました。ところが昼の間
は、真夏でも涼しく、静かなので、立ち寄る客も多く、
商売も上々だったのですが、夜中になると、真夜中から
朝方まで、竹刀を打ち合う音、気合の「エイエイジュウ」
という声で、とても騒がしく、眠れない日が幾日も幾日
も続いたのでした。

この騒音に悩まされた捨五郎さんは、二年もたつない
のに、この茶屋をたつんで、養江に引き上げたというこ
とです。

この茶屋は、そうとう大きい家でしたが、ある年の秋
に、野遊びに行かれた秋月の殿様が、お立寄りになり、
同家の大きい「いろりばた」で、昼食を召されたことが
あったと、捨五郎さんが、ほこらしげに話をされたとい
うことです。

米べと芋べ

持田 永友 千秋

昔、持田の百姓で、大変愉快で、大胆な男がいました。ところが、その男の「おなら」ときたら、とてつもない大きいもので、村中に響きわたる程でした。

ある日のこと、男は用事のために、町へ出かけ

ました。用事もすんで、帰る

頃には、もう夕暮れ近くになっていましたが、小丸街道をのんきに鼻歌まじりに、テクテクとわが家に向かっていました。ところが、時々立ち止まっては、すごいオナラを所かまわず、ブーツ、ブーツとひりながら、歩いていくのでした。

このすごいオナラの音を聞いた、ある士族（武士の家）のかかさんが、



「あゝ、百姓が芋べを、ひって通るぞー」

と、大声を出して冷やかしました。道行く人も皆、ゲラゲラと声をたてて笑っています。

ところが、これを聞いた男は、しゃくにさわってたまりません。しかしもともと太っ腹の男のことですから、その士族の家の、門前に立ちほだかつて、

「さすがは、士族のかかあだけあって、米べと芋べをかぎ分けるのか、馬鹿にするなーっ」

と、大声でどなりながら、まくし立てました。

かゝさんは、男の烈しい陰幕に驚き、早速男の前に首を垂れ、腰を低くして、あやまりました。

このことがあってから、士族の農民に対する言葉遣いがだんだんと変わり、お互いに、いつくしみ合うようになったということです。